

## 聖公会の在朝日本人伝道 ——英国人宣教師バジル・シンプソンの報告を中心に——

松山健作

### はじめに

聖公会の在朝日本人伝道は、朝鮮に上陸した SPG (The Society for the Propagation of the Gospel In Foreign Parts) の英国人宣教師によって行われた。この在朝日本人伝道は、他教派には見られない特別な様相がある。多くの場合、在朝日本人伝道は、日本から派遣された日本人教役者によってなされた。<sup>1</sup> しかし、聖公会の場合は、朝鮮に上陸した英国の宣教団が現地人に伝道する方針に基づき、朝鮮人、英国人、日本人へと活動した。

聖公会は、主教制であるため在朝日本人伝道は、初代主教コーフ (Charles John Corfe, 1843-1921) の方針に基づいていた。またこの働きは実際、草創期においては、英国人が朝鮮人に接触するよりも、日本人に接触する方が容易であり、済物浦 (仁川) の外国人租界地における夜間英学校から始まった。(写真①)

聖公会では、主教の代替わりによって多少の変化が伴うものの歴代の主教らは日本聖公会との関係を維持する上でも在朝日本人伝道を推進してきた経緯がある。しかし、ここで特徴的な事柄は、あくまでもその伝道の権利は、朝鮮聖公会の主教に委ねられていた点である。これは次第に日本帝国の支配が及んだといえども在朝日本人伝道の権利は、日本聖公会に移譲されなかった。またそのような姿勢が朝鮮聖公会の教会制度に対する一つの認識であったともいえる。

聖公会の伝道は、いかなる働きであっても司牧の最高責任は、その地を管轄する主教に委ねられている。しかし、実際的には実務者が各教会・地域に存在した。本稿で取り扱おうとする司祭バジル・シンプソン<sup>2</sup> (Basil Simpson, 1880-1942) もその一人である。彼の報告は、朝鮮聖公会第3代主教トロロップ (Mark Napier Trollope, 1862-1930) 司牧下において、1910年韓国併合以降の1915年からおよそ2年間の報告が、*The English Church Mission in Korea: Its Faith and Practice*<sup>3</sup>として英国において刊行された。本稿は、ここから当時の在朝日本人伝道について分析を試み、またバジル・シンプソンの在朝日本人伝道に対する姿勢を明らかにしようとするものである。

### 1. 韓国併合前後における聖公会の在朝日本人伝道

聖公会の在朝日本人伝道は、その草創期においては、初代主教コーフを中心に済物浦の外国人租界地近郊の日本人町に英国人宣教師らが入り込み伝道を行なった。<sup>4</sup> これらの働きは、時代ごとにランディース (Eli Barr Landis, 1865-1898)、スティーブン (Hans Thomas Christian Steenbunch, 1867-1926)、スマート (William H. Smart, 1852-没年不明)、カートライト (Stephen Cartlight, 1874-1909)、シャープ (Aubrey Lyster Sharpe, 1868-1958) という宣教師らに引き継がれ、日本帝国の進出が拡大するとともに伝道地域も拡大していった。(写真②)

この働きには、当初から日本人教役者の必要性が唱えられていたが、同時期に日本聖公会では海外伝道として台湾伝道 (在台日本人伝道) に力を注いでいたこともあり、実質的に海外に派遣する教役者不足に陥っていた。それゆえ、短期的に日本聖公会から聖職者が巡回し、朝鮮内の各地に散財する日本人信徒を訪問することもあったが、それらは継続的な活動を意味しなかった。巡回伝道の働きは、バジルが紙面を割いて報告しており、日本人の進出と居住地域の拡大に伴い、宣教部としては人材不足の中で巡回伝道そのものが非常に困難な働きの課題となっていた。

これらの働きを進展させるために第2代主教ターナー (Arthur Beresford Turner, 1862-1910) の下で、1907年頃から婦人伝道師の投入が始まった。(写真③) 在朝日本人教会における教役者不足は、この婦人伝道師の投入によって聖職不足を補填し、韓国併合前の在朝日本人の増加に対応した。この際、伝道の働きを担った婦人伝道師はグロージャン (Violet C Grosjean)、エルリントン (Beatrice Elrington)、稲葉春子、プーレイ (Alberta Pooley) が各地域に派遣され、また婦人伝道師養成のために1909年に在朝日本人の黒瀬文子が仙台青葉神学校へ派遣された。(写真④、⑤) 彼女たちは、あくまでも婦人伝道師であって聖職ではないため、 sacrament の執行は不可能なものの、聖書勉強会や教理勉強会など洗礼や堅信の準備、日曜学校、婦人会などを導き、大きく貢献したと考えられる。<sup>5</sup>

在朝日本人の急増は、日露戦争後の1905年第二日韓保護協約 (乙巳保護条約) が締結され本格化した。日本聖公会においては、韓国併合直前に伊藤博文の暗殺に反発が起こり、日本聖公会内で朝鮮聖公会を一地方部化する総会議案が提出されるなど、実際に教団内における朝鮮支配という雰囲気が露になる時代であった。<sup>6</sup>

このような雰囲気の中で韓国併合前に日本人教役者の鹽崎信吉が派遣されることになった。<sup>7</sup> ようやく日本人司祭が派遣され、またシャープがこの頃に朝鮮において働いた。彼は日本の植民地における日本人伝道に関して積極論を唱え、それらを自らのアイデンティティとした人物である。それが如実に現れるのは、朝鮮聖公会の第3代主教トロロップが選出された際であった。シャープは、トロロップの選出に「否」を唱えたわけであるが、その理由はトロロップが「反日的であるため」という理由であった。<sup>8</sup> そのような批判のためにトロロップは主教に聖別された後に、反日的態度を打ち消すために自らの朝鮮派遣については、「単にカンタベリー大主教の命令」であると表明しなければならず、韓国併合直後の朝鮮の

状況に適応するために政治的中立の立場を示さなければならなかった。<sup>9</sup> シャープからすればトロロップは「反日」と映ったかもしれないが、実際のところ彼自身も現地の政治状況に対して基本的に順応する姿勢を見せたと評価されている。<sup>10</sup> (写真⑥) このような雰囲気の中でバジルは、1915 年から朝鮮に赴任したのである。

## 2. バジル・シンプソンの報告

### ①在朝日本人伝道の位置

バジルは、韓国併合後シャープの後任として、1915 年から在朝日本人伝道の専任として朝鮮に派遣された。<sup>11</sup> (写真⑧) 彼は宣教団がその初期から携わってきた在朝日本人伝道の重要性を強く認識し、朝鮮人伝道と同様に重要であるとし、「万一この働きを見逃すのであれば、それはすべての宣教部を深く傷つける非常に決定的な失敗となるだろう。」<sup>12</sup> と記している。バジルの在朝日本人伝道に対する認識は、仮に朝鮮人伝道に宣教部の全精力を注ぐことにしても、その宣教的目的を果たすことは不可能であるという。つまり、彼は朝鮮人伝道を推進することと、在朝日本人伝道は別個の働きであり、朝鮮人伝道が在朝日本人伝道の代替にはならないという認識を示した。バジルにとって在朝日本人伝道は、日本聖公会を経て、朝鮮に派遣された宣教師としては、日本の信徒たちの祈りを実現する宣教的課題であり任務として捉えられていた。

バジルが在朝日本人伝道の必要性を確信したのは、韓国併合の影響が大きいと思われる。彼は、日本と朝鮮が隣国としての対立のあることを認識しており、それらは豊臣秀吉の文禄・慶長の役から始まり、さまざまな戦争を経て朝鮮における日本の影響が強まっていったことを歴史的に把握していた。そして彼は、さまざまな対立と葛藤の解決策として、韓国併合が日朝間における政治的な改善点であったという認識を、次のように示した。

1910 年日本は、朝鮮を膨張一路であった日本帝国に確固とした形で併合させたのである。併合以前に朝鮮に渡ってきた日本人の類型を見ると、一般的な人種間の敵対感を拡大させるような分類の人々であった。その後、両者間の関係は、明確に改善された。このような関係改善がなされるよう努めた人物は、朝鮮（今日では日本人は韓国を朝鮮と呼ぶ）の初代総督であった陸軍元帥の寺内正毅のおかげであり、彼はその後、日本の総理になった。<sup>13</sup>

韓国併合は、日本が朝鮮支配を決定づけた歴史的イベントであった。しかし、バジルは、これまでの東学農民戦争、日清、日露戦争などを通して、清に取って代わり、日本が朝鮮の混乱を治める役割を担う存在であると考えていた。その意味で初代朝鮮総督の寺内正毅（1852-1919）を高く評価した。

例えば、米国北長老会宣教師の場合は、韓国併合に対して、朝鮮人の立場を重要視し、日本の支配に抵抗する勢力としての役割を担ったことが際立つ。その一方で、聖公会の宣教師は必ずしもそのような立場をとらず、むしろ親日的な立場を示したのである。これは日本聖公会を経たバジルだけに見られる特徴ではなく、総体的に組織の体質として親日的な立場であった。例えば、第2代主教のターナーの時代であれば、安重根の伊藤博文殺害について、有能な人物を失ったと哀悼のメッセージを表明し、伊藤の政策は懷柔の一つであり、正義であり、略奪ではなかったと評価するほどであった。<sup>14</sup>

このような雰囲気の中で先述したようにバジルは、韓国併合によって日本は朝鮮に良い発展をもたらしていると、次のように報告している。

物質的次元においてみれば、朝鮮にあった日本の植民地政府は、驚くほどの発展をもたらした。一つ例を挙げるとしよう。かつての朝鮮王朝末期に朝鮮人は、非常に奥深い山を除いて、国全体のすべての木を切り払ってしまった。朝鮮人は、すべての灌木と草村はもちろん、さらには丘陵地の草でさえ切り払ってしまった。どんな植林事業も存在しないため、この国は次第に山がはげ、ひどい有様になった。これは朝鮮人や観光客など、すべてによく知られている事実である。大雨が降れば、丘が土砂崩れを起こし、毎年多量の米の収穫を台無しにした。しかし、日本人は徹底して持続的な植林事業を拡張した。日本人は、植樹などの措置を持続的に行い、学生などを植樹する働きに動員した。<sup>15</sup>

バジルは、植林に関する技術導入の例を皮切りに日本は物質面に困窮していた朝鮮に良い発展をもたらしていると認識していた。このような例は、宗教や教育の現場においても同様であり、朝鮮のさまざまな様相が日本化されることで発展することを肯定的に評価していた。そしてバジルをはじめとする聖公会の宣教師たちは、基本的に植民地によるこれらの発展を歓迎する姿勢であった。それゆえにバジルら宣教師は、韓国併合後の在朝日本人伝道をより一層重要な位置にあると認識していたのである。

## ②在朝日本人伝道の状況

韓国併合以降の在朝日本人伝道は、シャープと鹽崎を中心に、婦人伝道師らがそこに加わることによりなされていた。バジルは、韓国併合以降の教会に日本人が増え始めていたことを、次のように記録している。

南東京地方部において2人の司祭のシャープ司祭と鹽崎〔信吉〕司祭が朝鮮に入国した後にはじめて在朝日本人伝道は、重要な位置を占めるようになった。朝鮮が日本に

併合されるにしたい、日本人移民者が急増し、朝鮮に来訪した人々の中に聖公会の信徒の数が増えたのである。<sup>16</sup>

ここでバジルが記しているように朝鮮聖公会は、日本聖公会の南東京地方部と関係を持っていたことがわかる。これは在朝日本人伝道の草創期から継続していた関係性であり、朝鮮聖公会と南東京地方部は宣教の母体が同じであった。元来日本は、4つの宣教団（米国聖公会、SPG、CMS、カナダ聖公会）が上陸していたが、朝鮮聖公会と関係を維持したのは、おおよそ同じ母体の南東京地方部のみであった。朝鮮半島への伝道は、SPGに専有権が与えられており、日本からの派遣であっても同系統の宣教師、及び日本でそのような教育を受けた日本人が朝鮮へ派遣されていた。これら在朝日本人伝道に従事した教役者は、次のように各地域に振り分けられていたことがわかる。

シャープ司祭は、ソウルに本部を据え、この本部にエルリントン氏とグロージャン氏が共に働いた。後にエルリントン氏は、鹽崎司祭を助けるために釜山へと移動した。この日本人司祭は、釜山において働いて7年目を迎えており、数名にしか満たなかった信徒が、今日ではそこに100名に近い数まで成長するようになった。<sup>17</sup>

| 年              | 住所                                                                              | 教会名及び<br>巡回地 | 信徒数 | 礼拝時間                            | 担当教役者                                             |
|----------------|---------------------------------------------------------------------------------|--------------|-----|---------------------------------|---------------------------------------------------|
| 1916年<br>(大正5) | 朝鮮京城南米倉町90番地                                                                    | 京城聖公会        | 116 | 毎日8時、18時<br>主日9時、19時半<br>金曜日20時 | J. Basil. Sympson<br>宮澤九萬像<br>Miss Alberta Pooley |
|                | 仁川港山手町3丁目4番地                                                                    | 仁川聖公会        | 23  | 主日9時、19時<br>水曜日20時              | 〔一色榴吉〕                                            |
|                | 釜山港大廳町2丁目                                                                       | 釜山聖公会        | 82  | 主日9時、19時<br>水曜日21時<br>聖餐主日聖日    | 鹽崎信吉<br>Miss Elington<br>黒瀬文子                     |
|                | 大邱東門町11番地                                                                       | 大邱聖公会        | 35  | 毎月1回第4主日<br>(聖餐)                | 鹽崎信吉<br>Miss Grosjean                             |
|                | 安城、元山、西湖津、咸興、清津、会寧、<br>羅南、釋王寺、○原、抱川、長端、開城、<br>新幕、平壤、成川、義州、新義州、龍岩浦、<br>鎮南浦、長淵、間島 |              | 59  | 年2回以上巡回                         | John. Basil. Sympson<br>宮澤九萬像                     |

|  |                                                                                 |    |         |      |
|--|---------------------------------------------------------------------------------|----|---------|------|
|  | 安城、元山、西湖津、咸興、清津、会寧、<br>羅南、釋王寺、○原、抱川、長端、開城、<br>新幕、平壤、成川、義州、新義州、龍岩浦、<br>鎮南浦、長淵、間島 | 44 | 年2回以上巡回 | 鹽崎信吉 |
|--|---------------------------------------------------------------------------------|----|---------|------|

このように教役者は、各地域に振り分けられ、司祭と婦人伝道師がセットになって、一つないしは、2つの教会区で伝道活動を行うという構成になっていた。また釜山は、日本人が多く居住しており、まもなく信徒は100名という大台を越えようとしていた。日本聖公会に提出された統計報告では、1916年の時点で、バジル、執事宮澤九萬像（写真⑨）、プーレイがソウルと仁川の二つの教会区を担当しており、ソウルは116名、仁川は23名の信徒が登録されていた。また釜山においては、鹽崎、エルリントン、黒瀬文子の三人が働いており、釜山と大邱の二つの教会区を担当しており、釜山は82名、大邱は35名であった。（写真⑦）他にも彼らが巡回している地域に100名以上の信徒が存在し、この時期においてすでに朝鮮半島の全域に散財していたことを示している。<sup>18</sup>

礼拝のあり方については、すべての場所で統一されていたわけではない。仁川やソウルなどは、朝鮮人、日本人、英国人と混在する地域でもあり、それぞれの言語で礼拝がもたれていた。一方、釜山や大邱は、教会の成立そのものが日本人のためになされた背景があり、日本人のための教会としてのみ使用されていた。そのため、このような背景の教会においては、1945年まで日本語のみの礼拝をささげていた。<sup>19</sup>

バジルは、在朝日本人伝道の状況を報告しながら、その特徴と問題点を報告している。

朝鮮人伝道は、西海岸の本部から広がりはじめ、今日まで朝鮮半島の特定地域を占有している一方で、在朝日本人伝道は小規模に散財している様相を見せているが、朝鮮全体を網羅している。釜山、大邱、ソウル及び済物浦以外にも日本人信徒が住んでおり、およそ40箇所に至る大小の村などの所在地を含むが、この所在地は四方700マイル、300マイルに至る地域に散らばっている。しかし、このように広範な地域であるにもかかわらず、現在たった2人の司祭が存在するだけで、通常1名は英国人であり、もう1名は日本人であり、本書を執筆している時点においては、2名はすべて日本人である。私たちには3名の英国人女性があり、待望しているのは、この間ソウルにおいて働いていた他の日本人〔稲葉春子〕が間もなく日本から戻ることである。

しかし、この程度の人員では、次第に増加している日本人伝道においては、全く不足である。<sup>20</sup>

バジルの報告によると、朝鮮人伝道は一定の地域に住む朝鮮人を対象に行っており、大きな移動を伴う巡回は必要がなかったと伝えている。一方で在朝日本人伝道は、すでに朝鮮半島の全域に広がっていた。その理由は、一旦は仁川やソウル、釜山といった中心都市で滞在した日本人信徒であっても、さまざまな理由で数年の内に彼らは移動する理由が生じて同じ場所に長く居住しなかったことを示している。そのため、信徒数としては朝鮮人よりも日本人が少ないにもかかわらず、巡回先は多岐に渡る様相を呈していた。

これら在朝日本人伝道の困難さは、植民地の中で居住先が不安定な状況であった信徒らに合わせて行われなければならないと考えられていた。しかし、宣教部は朝鮮半島全域に散財する日本人信徒すべてに対応することは、困難であり教役者不足の壁にぶち当たっていたのである。

またバジルは、この時点で日本人教役者が鹽崎に加え、もう一人増員されたことを報告している。これは 1916 年ごろから加わった一色榴吉のことであり、彼とバジルは日本の沼津聖約翰教会で働いている頃から師弟関係にあり、何らかの形でバジルが一色を在朝日本人伝道に引き入れ、彼自身は在朝日本人伝道から手を引いた時に書かれていることがわかる。<sup>21</sup>

### ③在朝日本人信徒の特性

在朝日本人伝道に関わった英国人宣教師たちは、一貫して在朝日本人伝道の必要性を訴えた。それは、先述したように朝鮮が日本の植民地になることで、発展を遂げている事例を彼らが目にしていたからである。その意味で宣教師らは、植民地支配における朝鮮人の苦痛よりも、生活水準の向上を優先視していたといえる。また同時に日本人信徒の増加は、彼らにおいて目に見える形での収穫物であり、彼らの伝道熱に火をつけたのではないかと思われる。

そのような中でバジルは、内地の日本人と在朝日本人を分析し在朝日本人伝道に好機があると、次のように分析していた。

日本人は大概家族の中の年老いた者を後に引き継いできた。これは次第に新しい思想、特に新しい霊的思想に対してもっとも大きな障害物となってきたことを意味する。日本の高齢層、特に年老いた女性は仏教に執着し、とにかく家族の中に若い者がキリスト者になることを遮ろうとする反キリスト教的な傾向や意思を持っている。40歳以下で教育の恩恵を受けた日本人の大多数は、どんな宗教も持ち合わせないか、確固たる不可知論者である。国家神道に対する追従や特定の仏教宗派の復興、そして一種のクリスチャンサイエンスのような天理教という新しい宗派などが現れるのも、事情は同様である。さらに働き口を求め朝鮮に渡ってきた日本人青年層の中の大部分は、非常に孤独でこのような寂しさの中で新しい知識に対する強力な熱と出会う際、

これらがキリスト教を探究するように仕向けると、多くの場合驚くべきはじまりをもたらすのである。<sup>22</sup>

バジルは、在朝日本人が家の宗教は有しつつも、若年層の人々はそれに無関心であり、すでに家から離れた地でそれを拘束する年配者から束縛されない環境にあるとした。それら若年層は、故郷を離れて労働するという寂しさや孤独感を抱えながら、朝鮮において生活していると分析していた。このような要素は、西欧のキリスト教に出会った際に、新しい知識への探究心を沸き立たせ、彼らの生活に新たな糧を与えるものになると分析していた。

バジルのこのような考え方は、前任者であるシャープも同様であり、伝道の必要性をより過激に訴えた。シャープは、朝鮮、満州における日本人伝道に関わった後に、日本聖公会及び SPG が外地伝道に力を注がないことに対して、不満を爆発させたのである。

シャープは日本における伝道が進展しないために一種の失望感を現し、朝鮮、満州は信徒数が伸びているにもかかわらず、それに関心を示さない宣教部に対して痛烈に批判を加えたのである。彼の論理は、この時期においては内容的に在満日本人伝道に集中しているが、在満日本人伝道は在朝日本人伝道の延長線上にあり、彼はそれらの課題を日本聖公会内で、次のように訴えたのである。

何故私共を必要とする此の内地に何時までも強情に取りつきつつ居らねばならぬのか。そして私共を必要として居る場所を捨てて置くのであるか……エス・ピー・ヂーは何処で働いているか。聖公会は何処にあるか。<sup>23</sup>

シャープ、バジルをはじめとする英国人宣教師は、このように外地伝道への可能性を内地伝道よりも高く評価していた。これはおそらく実務に当たったという意味で外地伝道への思い入れが強かったという指摘もできるが、実際に内地よりも数的な成長を見せたことが彼らの根拠になっていたと思われる。次にバジルは、在朝日本人伝道を行うにあたり、今後の見通しについて、次のように記している。

現在、日本人信徒がいる地域は、実に 40 箇所程度になる。その数は、たゆまず増加している。この他にも私たちの中心的な朝鮮人教会の周辺に住む日本人のための働きは、どこであれ集会が発展する兆候を見せている。現在、このような地域にある司祭は、日本人伝道を通訳を介してのみ行うことができるのである。新しい司祭が宣教部に来るときに徐々に彼らが日本語を学ばなければならない必要が増えるであろう。それらがいかなる働きであろうとも関係ないのである。朝鮮人は、卓越した言語学者たちから現在すべての学生は、日本語を義務的に学ばなければならないだけでなく、非常に早く習得している。日本語に関する知識は、暫時すべての宣教部が必要になるであろう。<sup>24</sup>

バジルは、在朝日本人伝道が進展している状況を踏まえて、実務にあたる教役者や宣教部も日本語を習得する必要があると指摘する。彼は朝鮮における共通語がまもなく日本語になることを予測し、近い将来朝鮮人を日本語によって伝道することが可能になると考えていた。これはまさしく植民地経験者の視点であり、彼自身植民地内で行われる言語政策を奨励し、母語が奪われるという朝鮮人の苦しみに関心を寄せるという視点は欠落していた。

またバジルは、このように進展する在朝日本人伝道の構成員について、次のように記している。

ソウルにおいてもっとも目をみはる二つの部類の求道者は、次のようである。一つ目は、相当な社会的レベルに属する女性たち、すなわち、ソウルで働く官僚階層の婦人たちである。二つ目は、若い男女である。<sup>25</sup>

バジルは、ソウルにおける教会の構成員である求道者の社会的特性について、大きく二つに分けている。一つ目は、総督府などの政府機関に勤める日本人らの婦人層であった。バジルは、政府機関に勤める男性たちは、自らの公的立場ゆえに信仰を持つということはないが、その婦人たちがキリスト教徒になることに関しては、寛容であると認識していた。そのため、ソウルの在朝日本人の構成員は、政府機関の関係者家族で成り立っていたようである。またバジルが挙げている二つ目の「若い男女」は、独身者を指す表現である。先述したように宣教師らは、このような故郷や家族から離れ、単身で渡ってきた若い層に伝道の可能性を高く見出していた。

バジルは、1915 年降誕節に 12 名が堅信礼を受けたことを報告している。彼はその中の 5 名の若者の職業について記しており、朝鮮銀行の銀行員、気象庁職員、市庁職員、郵便局職員、電信局職員であったと記している。これらの例は、ソウルという地域性もあるが、ある一定の社会的な地位が保証されている職に就いている日本人たちの共同体であったことを示している。

#### ④巡回伝道について

在朝日本人伝道において、巡回伝道がもっとも困難を極める働きであった。日本人信徒らは、さまざまな理由で都市から地方に移住し、朝鮮半島の各地域に散らばっていた。困難であった理由は、教役者不足という事柄と日本人信徒らの移動にあった。この巡回伝道にあたる教役者は、その多くの場合、聖職によってなされる必要があった。なぜなら、それは訪れた地において sacrament の執行が伴うためであり、聖公会の規定により少なくとも 1 年に 2 回以上陪餐に与るということが念頭に置かれていたためである。しかし、巡回伝道にあた

る聖職は、当時バジルと鹽崎、一色のみであり、朝鮮半島を南北に分担し、巡回に当たった。1916年当時の巡回地域については、司祭一色榴吉<sup>26</sup>が次のように記している。

シンプソン氏此夏休暇帰英中の留守として、当主教よりセシル監督への要求に応じて来任せしものに候……当教会〔京城聖パウロ教会〕（即ち京城の面已）に属する信徒は約百二十名内受聖餐者は八十余名に候も、毎主日聖餐に陪するものは三十名内外に候、地方は遠きは義州、鎮南浦、龍巖浦、会寧、清津、羅南、元山等近きは平壤、開城、鐵原各所凡そ二十五ヶ所に散財致居候。聖餐式執行の為め遠きは春秋二期近きは毎月出張可致而して此地方の信徒は聖餐者三十八に候<sup>27</sup>

一色が報告しているように巡回地域は、朝鮮半島の広域に聖職が向かわなければならない状況であった。この働きは、実質的に人材不足のため朝鮮に遣わされた聖職数では限界を超えるものであったと想像できる。バジルは、この巡回伝道の働きについて、詳細に報告した。

まず在朝日本人伝道の巡回は、予算上、主要都市から朝鮮半島の地方に一人で訪問しなければならず、また一度の巡回で複数の場所を訪問するため、何週間かのまとまった時間を要した。彼らは主に鉄道と船を駆使して、聖餐式の式具・式服を携え巡回地に向かった。荷物持ちが雇える場合には、西洋風の食品も携え、自らが荷物を持つ必要がなかった。しかし、遠方への何週間もの巡回は、荷物持ちを同行させる資金もなく、そして言葉の通じない中での旅となり、彼らにとって大きな重荷となった。

地方の場合、駅から訪問先の家が近ければ、聖職が地方の駅に鉄道で到着する際、たいいていの日本人信徒は送り迎えする習慣があったことを報告している。しかし、日本人信徒たちは、外国人を接待する方法がわからないと躊躇し、多くの場合、宿泊先は日本式旅館の利用を勧めたようである。バジルは、この旅館での体験を次のように記している。

大部分の日本式旅館は、二階建てであり、通常二階において気に入った部屋を選ぶことになる。そして、その部屋において司祭はすべてのことを行う。すなわち、そこで泊まり、友人と語り合い、食事をし、夜はそこで寝る。そしてしばしばその部屋で司祭は、他の旅程に向けて出かける前に司祭を訪ねてくる信徒のために聖餐式を行うのである。旅館で出会った信徒が旅館で働く人々に影響を与えることになり、何度か早朝に行うこの荘厳な行事〔聖餐式〕は、そのような影響の絶頂をなすのである。特に元山にある旅館の場合、旅館の主人、荷物持ち一人、女性従業員一人が求道者としてなり、キリスト教についてさらに知りたいと望んでいる。<sup>28</sup>

バジルは、英国の読者に向けて、旅館の雰囲気、食事の内容、日本の文化的な慣習について記している。巡回伝道では、巡回先の家庭で聖餐式が行われるが、滞在先の旅館においてもしばしば聖餐式が執行された。聖餐式は、当然のことながら信徒が与るわけであるが、その際に未信徒である旅館の従業員にも不思議な影響を与えることがあり、元山にある旅館では、旅館の主人、荷物持ち、女性従業員が求道者になったことを報告した。バジルは、このような巡回伝道を朝鮮人伝道と比べ差異があることを、次のように記している。

日本人伝道と朝鮮人伝道の間には、田舎の旅という点にその違いがある。朝鮮人伝道の場合には、一定の地域においてなされるため、荷物持ちを働かせたり、あるいは下人を同伴することは、不可能なことではなく、一回にわずか数日だけ家を空ける程度である。しかし、日本人信徒を訪問する旅は、汽車で数百マイルを行かなければならないため、汽車の料金が高く下人を同伴させることもできない。そして数日程度ではなく、一度に何週に渡り家を空けることになり、また汽車を降りた後に自転車に乗って行かなければならないため、司祭が持っていくことのできる荷物は非常に限られる他なく、したがって、西洋式の食品を持っていくことはできない。幸いにもさまざまな面で極めて清潔な日本人は、食事に関しても同様であるため、西洋人も幾分かの間は、大きな困難もなく日本人の食事を食べることができるのである。<sup>29</sup>

バジルの報告している日本人伝道と朝鮮人伝道の差異は、日本人が一箇所に定住することがなく、仮に初期は仁川やソウル、釜山といった比較的日本人が多い場所において教会生活をしたとしても、転勤などによって地方に移動するケースが生じるためであった。またその他にも日本聖公会の信徒が朝鮮の地方に転勤するケースもあり、朝鮮人伝道とは異なる形で巡回者の行動範囲は、非常に広域を包括する必要が生じていた。

バジルは、このような巡回伝道の中でもう一つの困難を報告している。それは、言語的問題であった。彼は、日本聖公会を経験して朝鮮に入った宣教師であり、また日本人伝道の専任であったため日本語は習得していたものの、朝鮮語は習得していなかった。都心部での働きにおいては、日本語のみで不自由がなかったようであるが、地方を巡回した際は、必ずしも日本人町だけを訪問する訳ではなく、長い旅の中で朝鮮語を必要とする場面に遭遇した。しかし、彼は全く朝鮮語を介することができず、道を尋ねることさえできなかったことが、次のように記されている。

巡回伝道のまた他の困難は、まさに言語である。邑面所在地を旅行してみると、しばしば日本人に会うこともできず、20 マイルないし、30 マイルを行くことになる。それゆえ、朝鮮語を介することができない場合、完全に道を見失ったような状態にな

る。しかし、10 年後は、田舎の多くの子供たちが日本語を上手に駆使するだろうことから、このような言語上の困難は総じて無くなることだろう。<sup>30</sup>

バジルの報告する言語上の困難は、在朝日本人伝道の従事者に容易に生じたことが想像できる。しかし、ここで非常に興味深いのは、彼がまもなくそのような困難は植民地の言語政策によって解決されると考えていた点である。このように朝鮮聖公会に属した英国人宣教師たちは、日本による植民地政策を基本的に受け入れ、それによって生じる利点が宣教部にはあると考えていた。バジルは、このような巡回伝道について元山、清津、釜山などいくつかの個々の事例を取り上げて巡回伝道について報告したのである。

## おわりに

以上、バジルの報告書を通して在朝日本人伝道の位置、状況、特性、巡回伝道に分類し、1910 年代の聖公会の在朝日本人伝道について、分析を試みた。これらの記録からバジルは、在朝日本人伝道を基本的に朝鮮内における重要な働きであると認識していたことは明確である。バジルの報告は、当時のものとしては非常にまとまったものであり、英国の読者に在朝日本人伝道について知らせるためのものであった。これには随所に宣教師たちの朝鮮に対する姿勢、あるいは日本に対する姿勢が現れている。バジル自身、在朝日本人への関わりは2年と短期間である。彼にとっては、シャープが朝鮮を離れた後、日本人聖職が派遣されるまでの繋ぎの役割であったのかもしれない。彼が朝鮮を離れた後、在朝日本人教会にも日本人教役者が増え始め、変遷を遂げる時期へと突入する。

バジルは、この報告書の「結び」として、日本人信徒と朝鮮人信徒が今後一層交流することについて、次のように記している。

日本人と朝鮮人が共に礼拝に集うという光景は現時点では稀であるが、それよりも一層頻繁に行われることを願っている……神から朝鮮の日本人伝道に下されるすべての希望と祝福と共に私たちが祈ることは、神においてこの二つの民族の間の関係に関連するすべての問題において、教会を正しく導き、私たちのイエス・キリストに対する信仰によって、二つの民族すべてが究極的に回心することにおいて、私たちが役割を果たすための助けが与えられるだろう。<sup>31</sup>

バジルは、礼拝においても日本人と朝鮮人が共にすることを希求している。また在朝日本人伝道のために祈ることは、二つの民族が共に正しく神の前で回心していく営みであり、信仰者の役割であると認識していた。しかし、彼の論理はあくまでも朝鮮人が日本化される中で、二つの民族が一致、交流することを想定していたということが言えるであろう。

このバジルの報告について韓国教会史家の安教成は、韓国教会史の分野において、在朝日本人教会の歴史は、体系的に論じられておらず、史料に関しても収集が進んでないことを指摘している。そのため研究として発展しておらず、このバジルの報告が韓国教会史研究に寄与するところは大きいという。<sup>32</sup> 彼が指摘している通り、今後在朝日本人教会研究を通して移民者の教会がいかなる形で信仰を守ったというかについても検討する余地があり、長期的な課題であると考えている。

写真① 医師ランディースと夜間英学校の生徒たち



写真② 中国人と日本人 [中央]スマート



写真③ 〔後列左〕シャープ、〔前列中央〕ターナー



写真④ 釜山日本人教会 〔中央〕西欧人エルリントン



写真⑤ 子供を抱く黒瀬(菊田)文子



写真⑥ 〔中央左から〕トロロップ、シャープ



写真⑦ 〔中央〕トロロップ主教、〔後方〕バジル



写真⑧ 釜山聖公会の日本人信徒たち 〔右側式服〕鹽崎信吉、〔後方西欧人〕トロロップ



写真⑨〔後列〕1914年トロロップから執事接手を受けた宮澤九萬像

<sup>1</sup> 韓哲曦『日本帝国主義下の朝鮮伝道』日本基督教団出版局、1985年。

<sup>2</sup> 西川正文「B・シンプソン」『あかしびと』、聖公会出版、1974年、141-142頁。バジル・シ

ンプソンは、日本聖公会史において神戸地方部の主教として知られる。彼は主教フォス（Hugh J. Foss, 1848-1932）の後、1925 月から 1941 年まで 16 年間神戸地方部の主教として着任した。バジルは、英国ケンブリッジ大学ケインズ校、ウェールズの神学校で学び、1904 年に司祭に按手され、1910 年に SPG の宣教師として来日した。1915 年からは朝鮮聖公会に赴任し、1917 年から 2 年間は軍隊のチャプレンとして勤めた。その後、帰英してマリア・マグダレン教会の主任牧師となった。この頃、SPG では神戸地方部の主教を選考しており、日本語学び、日本での経験があったバジルが推薦された。バジルは、1925 年 9 月 29 日（聖ミカエル及び諸天使日）にロンドンのウェストミンスター大聖堂で神戸地方部の主教として聖別された。バジルは、第二次世界大戦が始まり、16 年勤めた神戸地方部から 1941 年に強制的に帰国させられることになった。

- <sup>3</sup> バジル・シンプソン「在朝日本人伝道」、セシル・ホッジス、安教成訳『英国聖公会宣教師の目に映った韓国人の信仰と風俗』サルリム社、2011 年。本稿は、英語版では頁数詳細でないため、韓国語版を参考にしている。
- <sup>4</sup> 松山健作「大韓聖公会初代主教コーフの宣教——日本人への活動を中心に」『キリスト教史学』キリスト教史学会、2015 年 7 月、212-230 頁。
- <sup>5</sup> ‘Work Among the Japanese’, *The Morning Calm*, No. 118, Vol. XIX, October 1908. pp. 143-144.
- <sup>6</sup> 松山健作「日本聖公会の在朝日本人伝道——後期在朝日本人伝道を中心に（1911-1945）」『日本の神学』日本基督教学会、2012 年、51-75 頁。
- <sup>7</sup> 「個人」『基督教週報』第 21 巻第 13 号 1910（明治 43）年 5 月 17 日、15 頁。
- <sup>8</sup> A. Hamish Ion, *The Cross and the Rising Sun*, Volume 2, Wilfrid Laurier University Press, 1993. pp. 143-145.
- <sup>9</sup> M. N. Trollope, Letter from the Bishop Designate, *The Morning Calm*, Jul 1911, No. 129, Vol. XXII, pp. 78-79.
- <sup>10</sup> 李在禎『大韓聖公会百年史』大韓聖公会出版部、1990 年、96-97 頁。
- <sup>11</sup> 「個人」『基督教週報』第 3 巻第 20 号 1915（大正 4）年 1 月 15 日、15 頁。
- <sup>12</sup> セシル・ホッジス、前掲書、111 頁。
- <sup>13</sup> セシル・ホッジス、前掲書、112-113 頁。
- <sup>14</sup> Prince Ito's Death, *The Morning Calm*, Jan 1910, No. 123, Vol. XXI, pp. 22-23.
- <sup>15</sup> セシル・ホッジス、前掲書、113 頁。
- <sup>16</sup> セシル・ホッジス、前掲書、115 頁。
- <sup>17</sup> セシル・ホッジス、前掲書、115-116 頁。
- <sup>18</sup> 『聖公会要覧』1916 年。
- <sup>19</sup> 同上。
- <sup>20</sup> セシル・ホッジス、前掲書、117 頁。
- <sup>21</sup> 「個人」『基督教週報』第 34 巻第 4 号 1916 年 9 月 22 日、9 頁。
- <sup>22</sup> セシル・ホッジス、前掲書、119-120 頁。
- <sup>23</sup> エ・エル・シャープ「満州よりの叫びと之に對する道」『基督教週報』1919 年 4 月 4 日、第 39 巻第 5 号、9-10 頁。

- <sup>24</sup> セシル・ホッジス、前掲書、124 頁。
- <sup>25</sup> セシル・ホッジス、前掲書、124-125 頁。
- <sup>26</sup> 『基督教週報』第 28 巻第 12 号 1913 年 12 月 19 日、15 頁。『基督教週報』第 28 巻第 17 号 1914 年 1 月 23 日、15 頁。『基督教週報』第 32 巻第 17 号 1915 年 12 月 24 日、14 頁。一色榴吉は、伝道師時代に 1909 年ごろから台湾伝道に関わった人物である。その後、1911 年から沼津聖約翰教会に就任し、執事（1913 年 12 月 15 日からバジル指導のもとで執事按手のための黙想を行なっているが、按手日は定かでない）、1915 年 12 月 21 日東京南大聖堂において監督タッカーから司祭に按手され、その後朝鮮に渡ったと考えられる。しかし、公式に派遣された記録は残っていない。しかしながら、一色は沼津においてバジルと共に働いており、何らかの形で一色が朝鮮へと渡るきっかけは、バジルとの関係性を有するものであったと推測できる。
- <sup>27</sup> 一色榴吉「京城聖公会」『基督教週報』1916 年 12 月 1 日、8 頁。
- <sup>28</sup> セシル・ホッジス、前掲書、129 頁。
- <sup>29</sup> セシル・ホッジス、前掲書、130-131 頁。
- <sup>30</sup> セシル・ホッジス、前掲書、132 頁。
- <sup>31</sup> セシル・ホッジス、前掲書、139 頁。
- <sup>32</sup> 安教成「解題：英国のキリスト教に触れることのできる良い機会」、セシル・ホッジス、前掲書、177-179 頁。

（まつやま・けんさく 明治学院大学キリスト教研究所協力研究員）